

2020/06/14

## ヨハネの福音書 講解メッセージ②

### 「私たちの間に住まわれた」ヨハネ 1:6-17

神は人をお造りになるとき、ご自分の外に人を造ったのではなく、ご自分を土台にして人を造り上げました。つまり、人は皆、自分の中に神の土台、光を持っているのです。神と私たちは一つです。

#### ■神はあなたに計画を持っている

「神から遣わされたヨハネという人が現れた。この人はあかしのために来た。光についてあかしするためであり、すべての人が彼によって信じるためである。彼は光ではなかった。ただ光についてあかしするために来たのである。」(ヨハネ 1:6-8)

ヨハネは、イエス様が来る前に、救い主が来られることを証しし、皆が神を信じるようにバプテスマを授けていました。ヨハネはこの働きのために、神から遣わされたのです。

このことからわかることは、神は、ただ意味もなく人を造ったのではなく、一人一人に計画を持って、この世に遣わしておられるということです。ヨハネは、イエス・キリストを証しする使命を与えられ、与えられた計画に従って生きました。あなたは、神の計画をしっかりと受け止め、神の使命を受け入れて生きることを願って生きているのでしょうか。人は、神を土台に造られ、神と共に生き、神の計画を遂行するように造られています。いわば神と二人三脚で生きているわけですから、もし、別々の道を進もうとすると、身動きが取れなくなり、不自由を感じます。自分の使命に気づき、それを実行して生きることが、自由を手にするということなのです。

多くの人は、自分が思い描くことを実行することが自由だと思っていますが、実はそうではありません。自分を楽しませ、自分を喜ばせたいと願うのは、肉の思いであって、そこに自由はないのです。肉の思いを満たすことで生まれるのは、自由ではなく心配事です。物を持つと管理しなければならず、人からの評判を得ると、それを維持しようとして人の目が気になります。それは、私たちに自由にするどころか不自由にします。いくら自由を手に入れたと思っても、この世界に自由は存在しないのです。

自由とは、本当に自由な方と一緒に生きることです。空を飛びたいと思ったら、飛べる人と一緒に行けば飛べます。海にもぐりたいと思ったら、もぐれる人と一緒に行けばもぐれます。この世界では神だけが自由を手にはしています。神の計画を知り、神と共に生きることが、まことの自由生きることなのです。カントは、神に仕えることがまことの自由であると言いました。仕えることは不自由だと思うかもしれませんが、そうではないのです。

神が私たちに与えている使命は、最終的に神を証しして福音に結びつくようになっていきます。一人でも多くの人に福音を伝えること、それが神の願いです。神があなたに持っておられる計画と神の思いを知り、それを実行できるようになれば、あなたは人生で自由を手にすることができるのです。

## ■神を知るにはどうすればよいのか

「すべての人を照らすそのまことの光が世に来ようとしていた。この方はもとから世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。この方はご自分のくにに来られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。」(ヨハネ 1:9-11)

イエス様が活動を開始しようとしているのに、人はその方を知らず、その方を受け入れようとしなかったことが問題なのだと述べられています。

実は私たちが抱えている問題の究極の原因は、神を認識できないことにあります。私たちは神のいのちによって造られ、まことの光、すなわちイエス様の命の土台を持っていますが、そのことを知らないため、神を受け入れようとしません。

それは、人に死が入り込んだためです。死とは有限性、すなわち朽ちるということです。しかし、神は永遠であり、自由であり、制約されず、朽ちません。神のいのちによって造られているにも関わらず、死が入り込んだために有限性となった私たちは、空間、時間という制限を持つようになり、有限なものしか認識することができなくなってしまいました。人間の理性や知性では神を認識することも理解することもできないことが私たちの問題の原点です。

人は本来、太陽の光を認識することができるように、神を感じ、神に愛を認識し、神が自分の土台であることを認識できるものでした。しかし、悪魔の仕業によって死が入り込んだため、今はそれがまったくできません。この「神を知らないということ」が私たちを苦しめている究極の問題です。

知性や理性で神を知ることができないため、人は想像によってそれを補おうとしました。自分で経験できないことを想像し、それを言葉にすることによって、あたかもその想像がまるで事実かのように理性が暴走し始めます。カントという哲学者は、これに終止符を打とうとしたのです。彼は、人間の理性には制限があり神を知ることにはできない、神は信仰の対象であり理性の対象ではない、と理性を切り捨てました。理性で知りえないため、「神はいない」とする人たちもいますが、それはただ理性では知ることができないというだけです。また、神がいることを理性で証明しようとするのも無駄なことです。

イエス様は「私はずみだ」と言いました。理性では、神を知ることができないということが、死であり私たちの制限です。神に対して人ができることは、ただ信じることです。

## ■神を信じるとは

「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。」(ヨハネ 1:12)

信じた人に与えられる神の子どもとされる特権とは、永遠のいのちのことです。

人間とは、体ではなく、何かを考えたり意識したりする精神のことです。人が考えたり、意識したりできるのは、私たちの中に普遍的な運動があるからで、聖書からわかることは、その運動とは「神」であるということです。神は人を形作り、そこに神ご自身のいのちを吹き込みました。私たちは皆神のいのちを貸し出されて生きものになったのです。ここに体を通して外からの刺激が加わったとき、神のいのちという普遍的な運動が物差しとなって、意識が生まれるのです。

人が、魂と呼んでいるものは、神のいのちです。神のいのちは永遠ですが、体は有限性です。体が朽ちると人はおしまいになり、いのちは神に返却されます。ですから、肉体の死は、人にとって滅びを意味するのです。

よく「人の魂は永遠である」と言われますが、それは人間の勝手な想像です。聖書は、永遠はイエス様を信じることでしかありえないと教えています。キリスト以外、救いはありません。初めから永遠に生きられる存在ならば、イエス・キリストは必要ありません。イエス・キリストを信じた時、私たちは朽ちないからだを着せられて、永遠に生きるものとなったのです。それが、「信じる人には神の子とされる特権をお与えになった。」ということです。

「この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。」(ヨハネ 1:13)

救いは、人の意欲や努力によって達成されるものではなく、ただ神によるものです。つまり、自分には意識できない潜在意識の段階で救われるのです。私たちの内の魂の声は肉体で聞くものではなく、潜在意識で認識されるものです。そこで無意識のうちに神の呼びかけに応答し、救われるのです。

「信仰」のギリシャ語である「ピステイス」には、「誠実な応答」という意味があります。信仰とは応答であり、神がこれを食べよと出してくれたものを受けとることです。

イエス・キリストは、あなたの心のドアを叩いておられます。応答とは、あなたがドアを開けることです。こうして、イエス様が入ってきてくださり、救われるのですが、これは、潜在意識の中での出来事ですから、いつ救われたのかは本人にはわかりません。しかし、潜在意識から健在意識に救われたことが伝わり、教会に行くようになり、告白して救いを自覚するようになります。その前に救われていたからこそ、イエスが主であると告白できるに至るのです。

よく「信仰による救い」と言われますが、正確には、信じる信仰によってではなく、十字架のあがないによって救われるのです。新共同訳ではそのように修正されています。人が救われているかどうかは外見ではわかりません。救うのは神の仕事であって、人の努力ではありません。ですから、自分が伝道をしなかったから救われなかった、などということはありません。伝道とは、神が救った人が御言葉を聞いて救いの自覚を持てるようにすることです。だから、聖書は、伝道を「収穫」「刈り取り」と表現し、イエス様は「あなたが蒔いたものではないものをあなたは収穫する」と語っておられるのです。

## ■増し加えられた恵みとは

「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。」(ヨハネ 1:14)

神が地上に来られ、その人としての名がイエスです。「イエス・キリスト」とは、「イエスはキリストである」、つまり、「イエスは神が約束した救い主である」ということを表しています。旧約聖書には救い主に関する預言が数多くあります。

「神である主の霊が、わたしの上にある。主はわたしに油をそそぎ、貧しい者に良い知らせを伝え、心の傷ついた者をいやすために、わたしを遣わされた。」(イザヤ 61:1)

「油をそそがれた者」は、ヘブライ語で「メシア」、ギリシャ語で「キリストス」と言い、私たちに救ってくださる「救い主」を意味します。

イエス様がこの地上に来られたのは、神に造られ生かされているのに、人は誰もそのことを知らなかったからです。だから、私はあなたを造り、あなたと一緒に生きていることを教えるために、私たちと同じ有限性の体を持ってこの地上に来られたのです。

「ヨハネはこの方について証言し、叫んで言った。『私のあとから来る方は、私にまさる方である。私より先におられたからである』と私が言ったのは、この方のことです。」私たちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けたのである。というのは、律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである。」(ヨハネ 1:15-17)

「恵みの上にさらに恵みを受けた」とは、イエス・キリストという土台によって造られるという恵みの上に、さらなる恵みを増し加えるためにこの方は来たということです。

私たちは、神が粘土細工のように人を造り、自分の外に人を造ったと勘違いしがちです。だから、神の言うことをきかなかつたら、「悔い改めて言うことをきかないと神に滅ぼされてしまう」と考えます。しかし、神は私たちをご自分の一部として造られました。もし、自分の器官がいうことをきかなくなったら、あなたはからだに向かって「悔い改めよ」と言うでしょうか。「言うことをきかなかつたら切り捨ててやる」と言うでしょうか。そうではなく、病気の器官を治療し、衰えた器官をいたわり、思い通りに動かないからだをなんとかしようとケアするはずですが。

このように、神が人をご自分の外に造ったのか一つに造ったのかは大変重要なのですが、人はそれを知らなかったのでイエス様が来られました。よく誤解されていますが、聖書には「罪を悔い改めよ」ということばは1回も出てきません。「罪を反省せよ」ということばもありません。「悔い改める」と日本語に訳されているギリシャ語は「メタノエオー」で、向きを

変えるという意味であり、その元となったヘブライ語は「シューヴ」で立ち返るという意味です。つまり、聖書は「罪から離れて神に立ち返りなさい」ということは教えています。神のもとに立ち返れば、まことのいやしがあるからです。神はあくまでも、「わたしのところに来なさい。休ませてあげるから。」と言っておられるのです。

神と私たちは一つであるから、神は人の苦しみをご自身も背負い、なんとしてもいやそうとしてくださるのです。神があなたをありのまま愛しているのは、あなたが神の一部だからです。神にとってあなたは自分のからだとして大切にできるしかない存在です。神はそのように人を造られたのです。

### ■神はあなたの罪を背負う

イエス様は、私たちが背負っている苦しみをいやすために、まず痛みとなっている罪をあぶり出そうとなさいます。それが律法です。律法とは罪をあぶりだすためのものであり、あぶりだされた罪はイエス様がいやしてくださいます。

イエス様が「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。」(ヨハネ 15:5)と言われる通り、私たちの本体は神様です。ですから、神様は私たちの苦しみをすべて背負ってくださるのです。「主はわたしに油をそそぎ、貧しい者に良い知らせを伝え、心の傷ついた者をいやすために、わたしを遣わされた。」(イザヤ 61:1) という預言を成就するためにイエス様は来られたのです。

「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」(Iヨハネ 1:9)

神は、「私がすべていやしてあげるから、あなたの罪を言い表してごらん」と言われます。神は決してあなたの罪から逃げません。あなたの苦しみをご自分のものとして向き合ってください。なぜなら、神とあなたは一つだからです。

私たちの苦しみは罪です。この罪を下ろす(言い表す)ことが、神のもとに立ち返ることです。私たちのうちには、私たちがいやしてくださる医者がいるのです。これは理性ではとうてい知り得ません。それを証しするために、イエス・キリストは来られたのです。こうして私たちは神の愛を知りました。

私たちの苦しみの原因は神を知らなくなったことです。ですから、自分が愛されていることがわからず不安になり、一生懸命見える安心を求めて生きています。それで人は、神の愛の代わりに人の愛、つまり人から承認されることを求めて生きています。しかし、人からの承認を求めると、比較や嫉妬や怒りが生まれます。その苦しみから目を背けようとして人は快樂に走ります。しかし、根本的な不安はなくなりません。この地上のどんな争いも戦争も、すべての原因は、愛されていることが見えないところにあります。

このことに対する神の解決は、「罪を無条件で赦す」ということです。私たちがそれを自覚できるように、神は私たちに罪を告白するよう導かれます。多くの罪を赦された者は多く愛

するようになり、このことを通して、神に愛されている自分を知り、不安が排除されるのです。これがすべての悪からきよめられるということです。

「もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにありません。」（Iヨハネ 1:10）

神のことばと向き合うとき、誰も罪がないとは言えません。自分には罪がないと言うことは、神の愛を無にすることです。「律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現した」（ヨハネ 1:17）とは、そういうことです。

私たちには、何があっても私たちを弁護してくださる方がいます。なぜなら、私たちはその方の一部だからです。それがイエス・キリストです。

「私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。もしだれかが罪を犯すことがあれば、私たちには、御父の前で弁護する方がいます。義なるイエス・キリストです。」（Iヨハネ 2:1）

あなたの内側には光があります。それは、イエス・キリストです。その光は、あなたをいやそうとし、同時に、どんなことがあってもあなたを弁護してくださいます。その方を信じればよいのです。